

高齢期の生活と地域の共同性

——宮古島市の住民組織調査から——

杉本久未子

1. 目的

高齢社会の課題に対応するために共助＝地域の共同性の強化が求められている。本報告は宮古島市を事例として高齢者の生活と地域の共同性とのかかわり、特に住民自治組織の役割を検討するものである。平成 17 年に平良市を中心に周辺の 4 町村が合併して成立した宮古島市では、大神島を除く 5 つの島が橋で結ばれ、内外からの観光客の増大、新たな自衛隊基地の建設など地域の変化が著しい。この地域は歴史的に東京や大阪、沖縄本島や八重山地域に多くの移住者を供給すると同時に、事業者や観光関連業者など島外からの移住者も多く、人びとの流動が住民組織のあり方にも一定の影響を及ぼしている。合併前の自治体の制度、産業構造、歴史的文化的蓄積などがもたらす住民自治組織の違いが高齢者の生活に及ぼす影響を分析する。

2. 方法

日本創成会議の資料によると、宮古島市は医療施設や介護施設が充実した地域とされる。県や市の取組みの成果であるが、医療・介護サービスの存在がそのまま高齢者の豊かな地域生活に結びつくわけではない。本研究では、宮古島市の地域特性や高齢者をめぐる状況を統計資料、先行研究、宮古島市役所および支所、福祉関連事業者へのインタビューから把握した。また、地域における高齢者の生活と住民自治組織等の関係を把握するために、行政連絡員（自治会長）アンケートを実施するとともに、自治会長インタビュー、郷友会関係者インタビューを行っている。

3. 結果

平成 27 年の宮古島市の高齢化率は 24.9% で沖縄県の 19.6% を大きく上回る。しかも地域差が大きく中心部の平良地区が 20% 程度なのに対し、周辺の城辺地区や伊良部地区では 36% を超える。行政連絡員アンケートからは回答者の半数は U ターン者であり、定年後に帰郷して地域活動を行う高齢者が一定数いることが確認された。「高齢者を敬う意識」や「暖かい人間関係」を地域の魅力としてあげる人も多いが、地域の最大の課題は高齢者支援となっている。自治会長等へのインタビューによると、集落の人びとが高齢者を祝う敬老会は自治会や郷友会の最大のイベントとなっており、周辺部の自治会では敬老会に平良市街地に流出している子どもたちも参加して盛大に祝う例が見られた。架橋により若者が流出した島嶼地域では他出した幼馴染が介護事業所を開設したり、離島の女性区長が高齢者のために島外の共同売店の協力のもとに移動販売を行う取組みが始まっている。ただ、宮古島市では 108 行政区のうち平良地区で 24 ケ所、伊良部地区で 2 ケ所自治会が存在しない地区がある。そこでは、民生委員のなり手も不足し、高齢者の生活実態が把握しにくく、高齢者を地域ぐるみでサポートする体制が弱いことが問題となっている。

4. 結論

宮古島は人情が厚く地域の結びつきが強いとされるが、近年共同性の崩壊が進んでいる。都市化が進む中心部では住民自治組織が消滅する地域があり、郊外では混住化により、周辺部では高齢化の進展により住民自治組織の活動が弱体化する地域が見られる。そのなかで意欲的な女性の取組みが始まるとともに、他出した幼馴染や郷友会など、過去の地域にむすびつく経験の共有者とのネットワークの重要性が強まっている。本報告は科学研究費補助金 (JP16H03706) および同 (JP15K03998) の成果の一部である。